佐佐木信綱記念館だより

第二十一号

発行
鈴鹿市
鈴鹿市教育委員会
連絡先
佐佐木信綱記念館
鈴鹿市石薬師町
1707-3
℡059-374-3140

目　次

寄稿「ひとひらの夢――山中智恵子氏を偲ぶ」　橋本　俊明……1
記念館ニュース「十八年度特別展報告　ほか」　黒田栄子・磯上知里……2
「おもな新資料の紹介」　信綱一首（二十一）……3
「雑考　卯の花の匂ふ」　伊藤　盛暁……4
展示室だより「信綱と坂田富美展開催中」　磯上　知里……4

ひとひらの夢
――山中智恵子氏を偲ぶ

橋本俊明（はしもとしゅんめい）

■山中智恵子没後一年

草思舎主人山中智恵子氏が亡くなられて、間もなく一年になる。お弟子さん仲間の「不断桜グループ」が中心となって、命日の三月九日に歌碑を建立、十一日には一周忌法要を営み、偲ぶ会も催される。更に九日から十一日まで、子安観音寺内静思庵において遺墨展も開かれる。境内の歌碑の歌は次の通りである。

・法の道かきりもあらぬ真言に朱のころもの人そたふとき

「鴨料理だるまや」にて
平成４年・撮影橋本俊明

■師は佐美雄ひとり

山中氏のご厚誼を受けるようになったのは確か、昭和四十年頃かと思うが、爾来、即かず離れず、そっと見守って下さっているというスタンスだった。最初お逢いした折は一種の女傑というか、威風があって氏を先生と呼んだが「橋本さん、先生は何人もいてはいけないの。私は前川先生だけが師。だから山中さんでいいの」と前川佐美雄先生の若書きの歌と思われる軸の掛けられている座敷間でさとされた。種々の雑談の中で「覇王樹」の記念行事で前川先生に何度かお逢いしたことを話した。「覇王樹」の関西の雄であった桐田蕗村追悼号に先生が一文を寄せておられる。「心の花」にいた若い頃、川田順他錚々たる先輩を差し置いて、自分の歌が他誌に初めて取り上げられたことがあり、感動したと書いている。その他誌というのが私の所属する「覇王樹」だった。そんなことを恩義に感じておられ、当社の記念行事には極力出席頂いていると、先師松井如流先生から聞かされたものである。そんなことを他愛なく話したこともあった。本の山に囲まれ、歌壇を論じ、食事を共にしたあの座敷間で話すことも、もう潰えた。

■完食の鴨料理

氏は見かけによらず健啖家で、あちこち美味を求め、車を駆けったことは一再ではなかった。その際、大抵下手な記念写真を私は撮った。三重県立美術館で「浅野弥衛展」があり、可愛がっておられた浅野美子さんがスピーチされるというのでご一緒した。その帰りに、県立図書館へ寄りたいと言うので車で回った。氏の著書は意外と少なく、ちょっと淋しそうであった。二階に文学コーナーがあり、そこで一枚撮った。それが沖積社版の歌集『山中智恵子』に載せられている。珍しく洋装であった。また、ある日は加佐登神社下の「鴨料理だるまや」へ新見和子氏、昨年故人となられた浅生千代子氏の四人で鴨料理を食べに出かけた。女性軍はなかなか総てを食べ切れない風であったが、氏と私は完食した。そこで撮った写真がアサヒグラフの別冊「平成俳壇・歌壇」（平成四年十二月）に載っている。氏は「他の人は撮影者名を出しているのに橋本さんの名前を出さなくてごめんなさいね」と謝られた。ともかく元気な頃の、あの健啖ぶりが懐かしい。

■系譜につながる思い

昨年、信綱記念祭で「資料に見る竹柏会此事挿話」という話をさせてもらった。その折、「短歌現代」平成十八年九月号の特集「私が選ぶ美しい歌五首」の中に、信綱の、

・ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲　「新月」

が逸見喜久雄、松岡裕子、金子貞雄、沖ななも氏ら結社・流派の違う歌人に選ばれており、このことはこの歌が蓋し、名歌であることの証左であると話したことである。収載の『新月』は翌年、茂吉の『赤光』の上梓があったりして、余り俎上に上がらなかった歌集だけに、信綱先生がご存命ならば、さぞかし喜ばれたことだろう。実は山中氏もこの歌を好み、平成十三年十一月号「短歌」に発表の佐美雄師追憶の一首に、思いを重ねたという話をされた。

・ひとひらの夢といふとも哀しきか尾を落したる西域の夢
・佐美雄師に肩抱かれし夢みしか喜寿にして成る恋のごとしも

（昭和二十一年三重生まれ。歌人・短歌史研究家。歌集『一親』『カシオペア季』）

雑考
卯の花の匂ふ

伊藤盛暁

卯の花が咲く頃になると、来館者に時々「卯の花はにおいませんね」と言われる。信綱が作詞した唱歌「夏は来ぬ」の一番に、「卯の花の匂ふ垣根に」の一節があるからであろう。

この「匂ふ」は、花の色が美しく照り映えるという意であり、視覚の面での表現である。そういう用例は信綱の歌にいくつもある。

人去りてのこるつつじの花ただにくれなゐにほふ春の山なり

なお、臭覚の表現として「夏は来ぬ」の三番に「橘のかをる軒端に」と歌われているように、「かをる」が用いられている。

沈丁花ほのかにかをる宵やみの道を今夜もゆきかへりせし

このことからも「匂ふ」が香りの意ではないことがわかる。

また、「信綱は卯の花を歌に詠んでいるのですか」と問われたことがある。私も知りたくなって、『佐佐木信綱全歌集』（佐佐木幸綱監修・ながらみ書房刊）でさがしてみた。

麦生黄なる野の果を風光り流れ丘の上は今卯の花のさかり

酔歩蹌踉山上憶良いゆくあとにそひゆく道の卯の花月夜

椎わか葉瑞葉けぶれるがごとき下にとくさける卯木白しとも白し

卯の花の学名は、ユキノシタ科の「うつぎ」（空木・卯木）であるが、スイカズラ科の「つくばねうつぎ」を詠んだ歌が五首ある。

宵やみの庭の一隅白金を枝にちらせるつくばねうつぎ

また、『ある老歌人の思ひ出』（信綱著・朝日新聞社刊）に次の歌が紹介されている。

夏は来ぬ伊勢や難波と遊ぶ間に山ほととぎすつぼむ卯の花

この他にも卯の花を詠んだ歌があると思われるが私の力では及ばない。卯の花は万葉人の花であり、万葉集に二十二首あるという。

卯の花の咲き散る丘ゆほととぎす鳴きてさ渡る君は聞きつや

信綱の生家の庭の卯の花が芽吹き始めた。咲き匂ふ日が待ち遠しい。

（佐佐木信綱記念館長）

展示室だより
「信綱と坂田富美」展開催中

信綱が西片町に住んでいた頃（大正元～昭和十九年）の秘書の一人に、坂田富美が挙げられます。

平成十七年一月・四月にわけて、坂田富美の遺品関係七点が新たに寄贈されました。これを受けて、只今「信綱と坂田富美」展を開催しています。

坂田富美（明治三十五～平成七年、一九〇二～一九九五）は、坂田伝蔵（教育者）の長女（六男二女）として、東京に生れました。長兄の武雄は「サカタのタネ」の創業者として知られています。富美は大正十四年に日本女子大学を卒業し、この前後より信綱に師事し、西片町時代を中心に活躍しました。昭和五十六年には歌集『秋ふかき』を、六十年には父母のことを綴った『しのふくさ』を刊行しています。

富美は『心の花　竹柏園先生祝賀（喜寿）記念号三』（昭和二十三年九月）の中で「西片町時代」と題し、当時の思い出を寄せています。

「故間島弟彦（門人、一八七一～一九二八）様の御紹介で、私が初めて西片町に御伺ひしたのは、大正十三年であつたかと思ふ」と、信綱に師事したきっかけを書いています。信綱が周到かつ綿密な仕事ぶりであったこと、原稿の一字一句もおろそかにせず、何度も校正を行っていたこと、紙を大切にするという無言の尊い教えを受けたことなどを記しています。さらに、門人の九條武子や信綱から日本文学や歌を学んでいたロシアのアンナ・グルスキナ（清水浪子）とのエピソードも綴られ、当時の信綱の様子や交流がよくうかがえます。

また、富美は『心の花　佐佐木信綱追悼号』（昭和三十九年四月）にも同じ題で、信綱を偲ぶ文章を寄せています。

「先生のお名は早くから存じ上げていたので、相当の御年齢の方であろうと想像申上げていた私は、意外にお若いのに先づ驚いたことであつた。私は、その頃から長く先生のお側にあつてお書き物のお手伝いをしていたので、自然先生の御身辺を存じ上げるようになつた」ことなど、信綱との尽きぬ思い出などを回想しています。

このような交流を紹介するとともに、富美が大切にしていた信綱肖像写真や書籍・『心の花』をはじめ、富美の歌集や短冊等を展示していますので、ぜひご覧ください。

記念館ニュース

平成十八年度特別展報告

十一月二十二日(水)から平成十九年一月十四日(日)まで、「近世鈴鹿の文人たち―佐々木弘綱と磯部長恒の交流を中心に―」というテーマで、十八年度佐佐木信綱記念館特別展を開催しました。

信綱の父弘綱（一八二八～一八九一）は石薬師で生まれ、二十歳より足代弘訓（伊勢神宮神官、国学者）に入門し、歌の才能を発揮しました。一方の磯部長恒（一七九七～一八七〇）は神戸の菓子商の家に生まれ、俳人であった父東流の影響で俳諧をたしなみ、歌は弘綱と同師の弘訓に学びました。

弘綱と長恒は弘訓を通じて交流を深め、歌の道で年齢を超えた交わりを結びます。二人が歌や学問の知識を互いに教示し合い、絶えず切磋琢磨し合っていたことなど、親密さがうかがえる「長恒宛弘綱書簡」等の資料を展示しました。弘綱は長恒の弟華渓とも親しかったようで、華渓が画を弘綱が賛をした「月ヶ瀬画賛」等の資料も紹介しました。

また、弘綱と長恒は白子の沖安海（伊勢型紙商人、国学者）や最後の神戸藩主である本多忠貫とも交流がありました。忠貫は「山辺御井之碑」を建碑しましたが、碑文作成や揮毫をしたのは、歌の師を務めた長恒でした。長恒は碑文を完成させるにあたり、弘綱らの助言を参考にしています。長恒の考証草稿や弘綱の随筆、忠貫の掛軸等も展示し、その関係を紹介しました。

この度の特別展では、多くの来館者に関心をもっていただき、大きな反響を得ました。貴重な情報も寄せられ、ご教示賜りました皆さまに厚くお礼申し上げます。

今後も、埋もれた郷土の文人たちを紹介することができるよう、地道な顕彰活動を続けてまいりたいと思います。

特別展図録刊行

十八年度特別展について、テーマ別に資料の写真や解説をまとめた図録を刊行しました。

弘綱や長恒、また鈴鹿の文人たちを知る一資料として、ご活用いただければ幸いに存じます。

講演会「磯部東流・長恒の足跡」

講師　中部大学教授　岡本　勝氏

十一月二十六日(日)午後一時半～四時まで、「磯部東流・長恒の足跡」と題した講演会をジェフリーすずかで開催しました。

「磯部東流は神戸藩主本多忠永（清秋）に師事し、嘯月・東流の俳号を与えられ、神戸を中心に活躍した俳人であった。その子長恒は本多忠貫と深く関わり、俳諧、国学・和歌、書道、生け花に多才を発揮し、記録家（几帳面な筆まめな性格）であり、また蔵書の寄贈も行った」ことなど、東流・長恒親子の業績について、資料映像を交えながらご講演いただきました。先生のお話は終始聴講者を惹きつけ、東流・長恒親子の人柄を語る大変有意義な講演会となりました。

（岡本先生は三月十一日にご逝去されました。謹んで哀悼の意を表します）

講演会「磯部東流・長恒の足跡」に参加して

鈴鹿市神戸　黒田　栄子

私は、神戸の黒田家に嫁いでから五十年あまりが過ぎましたが、主人が病に臥せてからというもの、今日ほど気持ちが晴れ晴れした日はございませんでした。我が家には、代々受け継がれた磯部東流・長恒親子に関する資料があり、先代からは大切なものであると教えられてはおりましたが、本当に貴重であることをお教えいただいたのは、本日ご講演された岡本先生でした。

これらの資料の多くは、三重県立図書館に預けておりますが、石薬師の佐佐木信綱記念館の特別展で、今回、地元鈴鹿の多くの皆さんにご覧いただけたことで、東流・長恒親子の名が広く知られることになり、大変うれしく思っております。さらに、岡本先生のご講演では、東流・長恒親子の業績をわかりやすくお話いただいたことで、郷土鈴鹿の文化水準の高さを皆さんに知っていただいたのではないかと感激しております。

岡本先生をはじめ、関係者の皆さんありがとうございました。

「うのはな」の看板を新たに設置

平成十七年三月、新たに「うのはな」の説明と信綱短歌を添えた看板を設置しました。

玄関前の看板で「夏は来ぬ伊勢や難波と遊ぶ間に山ほととぎすつぼむ卯の花」という信綱の短歌を紹介しています。

これは信綱が大阪の「いせや」で「すっぽん」料理を食べた時に詠んだ歌です。同時に「夏は来ぬ」も歌の中に詠み込んでいて、大変遊び心のある歌です。

おもな新資料の紹介

平成十八年四月、信綱ゆかりの「万葉蔵」内に設置されていた「書棚」が寄贈されました。これらについて紹介します。

写真①

「万葉蔵」について

信綱は、大正元～昭和十九年（四十一～七十三歳）まで、本郷西片町（東京都文京区西片）に住んでいました。

昭和八年一月、信綱は還暦記念に、門人達から「万葉蔵」を贈られました。当時、「万葉蔵」は信綱邸宅と棟続きになっており、信綱愛用の書庫（写真①）として使われていました。蔵の名には「万世までも伝われかし」という意が込められており、入り口には西園寺公望筆、香取秀真鋳刻の扁額が取り付けられていたそうです。また、蔵の前にはサンルームが設けられていました。

現存していた「万葉蔵」について

今日まで信綱邸宅については、文京区が平成十三年に建てた看板「信綱邸宅跡」がその片鱗を伝えています。

平成十七年十一月、現所有者の住居新築に伴い、文京区の視察が行われました。そして、「信綱居住当時の蔵の可能性が高い」ということになり、文京区から当館へ照会がありました。幸い所蔵資料の「万葉蔵」記念絵葉書から、蔵の外観がうかがえました。解体前には調査が行われ、当館や信綱のご子孫の方々も現地に出向き、「万葉蔵」の現存が確認されました。

「万葉蔵」は、蔵を中心に住宅部分が囲むような形で増・改築されており、外観からは全く蔵があるように見えなかったため、今まで気づかなかったのです。扁額やサンルームは残っていませんが、蔵はほぼ原型を留めていました。また、「蔵の位置は変わらないが当時の邸宅の門（入り口）と現在の門の位置が違っている」こと、「信綱が西片町を離れた後より戦後しばらくの間、邸宅には信綱の子供たち――綱子・弘子・富士子・道子・治綱・逸人（富士子一家退去後に移住、手放すまで管理）――一家が同居していた」ことなど、ご子孫から貴重なお話も伺うことができました。

「万葉蔵」は二階建て、「鎮ブロック」を用いた造りで、外壁には薄茶色のタイルが使用され、モダンかつ実用的、なお威風を感じさせる造りです。

「鎮ブロック」造というのは、中村鎮（一八九〇～一九三三）が大正十年の函館大火復興の際に採用した「中村式鉄筋コンクリートブロック」構造のことで、耐震耐火性などに優れていたとされています。信綱も大正十二年の関東大震災により編纂中の『校本万葉集』や貴重本類が焼失した体験をふまえ、「鎮ブロック」造にしたと思われます。

書棚の寄贈について

残念ながら、諸事情により、「万葉蔵」は平成十八年三月に取り壊されました。

写真②

しかし、ご厚意により、蔵内二階に設置されていた書棚を当館が譲り受けました。書棚は二階へ上がる階段上部の空きスペースをうまく利用して設置されており（写真②）、その外枠には、一～十の信綱によって付されたと考えられる数字（一、六、八・九は欠損）が記された紙が貼り付けられていました。外枠が壁面に固定されていたため、取り外す時に書棚本体と外枠の一部に分解されました。

書棚の寄贈にあたっては、文京ふるさと歴史館をはじめ、ご尽力・ご協力を賜りました関係の皆さま、誠にありがとうございました。

今後について

今後は「万葉蔵」の歴史を物語る資料として、活用していきたいと考えます。現在は信綱の生家にて、展示しています。

このほか、信綱編『列聖珠藻・聖徳余光』、『小島琢磨（信綱孫）声楽集CD』、「信綱短冊」など、新たな資料が当館の所蔵に加わりました。

今年度も当館の資料充実のため、多くの皆さまにご寄贈・ご協力を賜わりましたこと、厚くお礼申し上げます。

信綱一首・21

山辺の御井にとくだる山ぞひみち
遠松風の音をすがしむ

『佐佐木信綱歌集』「山と水と」所収、昭和三十一年刊

昔、きれいな水がわき出ていたという、「山辺御井」にくだる山ぞい道をいくと、遠くの松風の音がすがすがしい。

「山辺御井」は現鈴鹿市山辺町に伝わり、本多忠貫が建碑した「山辺御井之碑」と民家の庭先にある「山辺御井」碑がある。山辺町以外にも三重・奈良県各地に伝承が残る。信綱が昭和二十五年の最後の故郷訪問の際に、「山辺御井」を訪ねて詠んだ一首。

「信綱かるた」より